

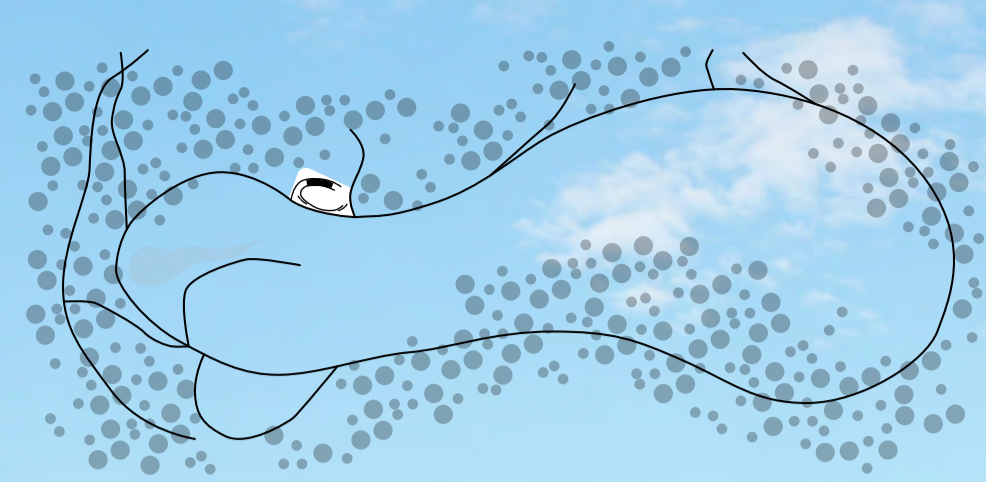
どんぐりの森と池

どんぐりコロコロ ドンブリコ
おいけにはまって さあたへん
どじょうがでてきて こんにちは
ぼっちゃんいっしょに あそびましょう

童謡「どんぐりころころ」の歌詞にあるように、ころがってはまってしまったお池で、どじょうと出会いいっしょに遊ぶ。SNSやコロナ禍による生活の変化で対面の偶発的な出会いが減っている現代社会において、そんな場所、風景をつくりたい。これからの都市基幹公園の在り方として、ささやかな出会いのきっかけを機能として持たせたトイレの計画である。

水辺に生き物が集まる風景を様々な場所で見ず。どんぐりころころの歌詞にもある「池」から着想を得た楕円を丸太で描く。波紋のように少し広がって丸太が並ぶ。そんな「池」のほりに建つトイレ、待ち人は丸太に腰をかけ、子供たちは登ったりぐるぐると駆け回ったりする。丸太の反対側から知らない子が顔を出すと、驚いてたじろいたり、いっしょになって遊びだしたりする。

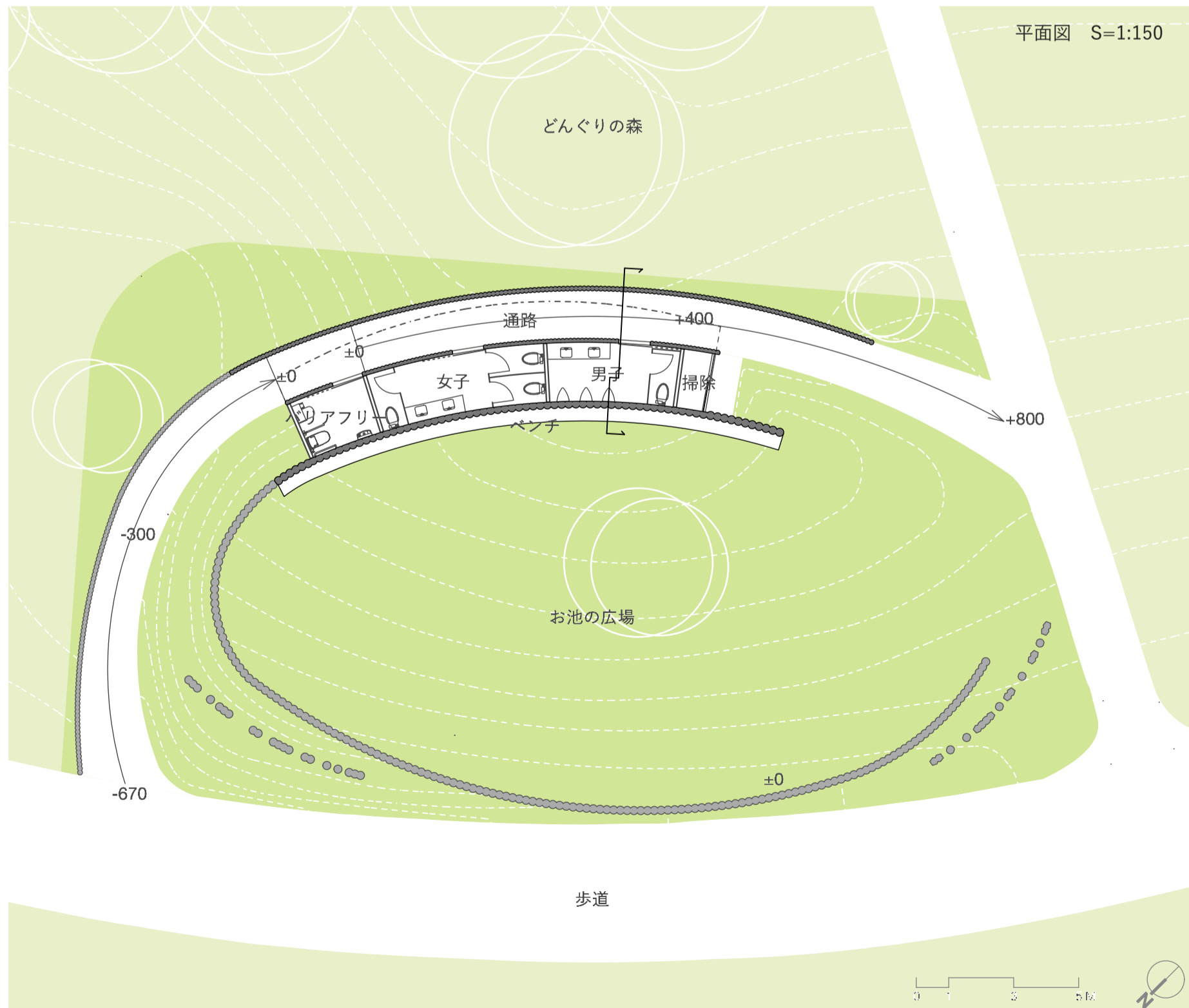
なだらかな起伏のはらっぱで大人はくつろぎ、ボール遊びなどを楽しむそばで、子供たちはどんぐりの池で走り回り、出会い、初めて会った誰かとのひととき過ごす。そんな風景を眺めながら、大人たちもまた心をほぐし、心身共に日々の疲れから解放される。



全体配置図：原っぱの外縁、森のくぼみにできる溜まり場

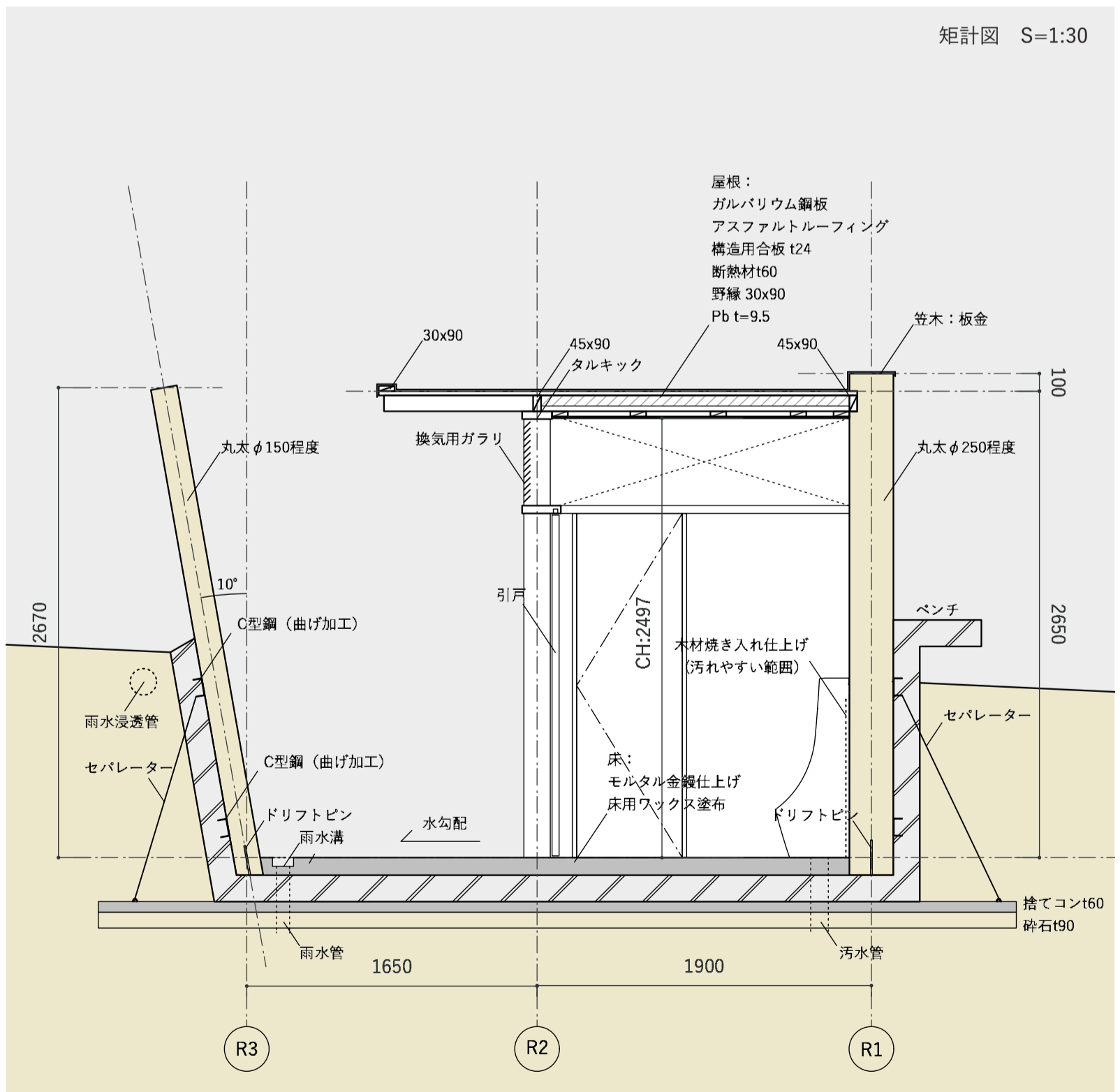


地形の連続性は保ちつつ、敷地全体を丸太で柔らかに包むことで、人がより溜まりやすくなるきっかけとなる。歩道に沿って並ぶ丸太は腰掛に、トイレの壁になる丸太は安心感を生む背もたれに。将来的には広場の中央にある樹木が心地の良い影を落としてくれるであろう。かつてのスタンドを思い起こさせるような場所になる。



丸太の波紋が広がる

勾配が激しい公園の地形に対して、トイレに行く時くらい、誰もが少しでも安心して移動できるように、敷地の最も低い場所から高い場所へ緩やかに通路を通し、既存の歩道と繋ぐ。その道に沿うようにトイレを配置し、広場側から入口が直接見えないように配慮をした。その道に両側に並んだ丸太は高さを変えながら敷地全体を柔らかに包みこみ、人を受け止めるきっかけとなる。歩道に沿って並ぶ低い丸太は少し腰掛けるのにちょうど良い。高さのある丸太は、どんぐりの森を背負うように安心感のある背もたれとなり、ゆっくりと公園全体を眺められる場所となる。また、子供たちにとっては丸太に沿ってクルクル走り回る、恰好の遊び場となるであろう。



型枠から仕上げ、家具にまで。変幻自在な丸太の役割

新しく緩やかな勾配で通す通路は切通しとなり、それに沿うように配したトイレ本体の建物の半分が地中に埋まることになる。その土留として、丸太を束ねたものを型枠とし、山肌工事に用いられる「木製残存型枠工法」を採用する。敷地全体に波紋のように広がる丸太は、トイレの仕上げから、広場のベンチにまで、その役割を変えるが、この工法を用いることで、コンクリート基礎の型枠にもなるのである。工期の短縮と、コストの削減にも貢献をし、建物の高さを抑えることで景観にも配慮した。



空間体験の豊かな通路

人の多い広場側からトイレへの視線は遮りつつも、片側の丸太を傾斜させ並べることで、空に向けて開き、閉鎖的な空間ではなくなる。緩やかな通路を歩いていくと、身体の半分が地中へと潜り、徐々に視界が限定され空へと向けられる、そこから開けた先にはどんぐりの森が広がる。印象的なシークエンスが得られる。



歩道とトイレまでの通路を緩やかにつなぎ、バリアフリーに配慮をする。建物の半分が地中に埋まり高さを抑えることで、背景のどんぐりの森との調和も図ることができる。



丸太に沿って照明を設置し、敷地全体を明るく灯す。

切り株の未来

大きな樹木が立ち並ぶ根岸公園。その中には寿命を迎え切り倒された切り株が点在していた。それらを抜根し更地に戻すことはしない。切り株が現れるたびに新しい居場所が生まれるように、新しいトイレに用いた丸太は、公園全体にも波紋を広げ、切り株の周りを取り囲む。今までの公園の風景を作ってきた切り株は記憶としてその場にただでなく、人を集め、森と地面を通して繋がり続け、そこから青つ新芽の宿り木にもなる。そして未来の風景を作る。

